

関川村における災害① ー 羽越水害

羽越水害の概要

昭和42(1967)年8月28日から29日にかけて、新潟県下越地方から山形県南西部は記録的な集中豪雨に見舞われました。

総降水量の最大値は新潟県黒川村(現胎内市)の胎内第1ダム観測地点で748ミリを記録し、各地の山間部や溪谷で山肌が崩れ落ち、山形県小国町や新潟県関川村、黒川村では土石流や鉄砲水、河川の氾濫によって多くの死者・行方不明者が出る大災害となりました。

関川市における被害

8月28日は、朝から雨は小降りでした。午前11時すぎ頃から、大石川の農業用水取り入れ口である大堰の破堤と荒川の増水が心配されはじめました。午後1時近くには、雨が激しくなり、村内全河川の危険箇所の水防警戒が発令されました。特に荒川は、普通警戒水位190センチ、危険水位240センチですが、すでに250センチを記録し、逐次その水量が増しているところでした。午後2時の時点で水位292センチを超えたため、消防団長は一般の水防協力者にも要請し、村内中小河川36カ所にわたって、積上袋を中心とした水防作業を展開しました。午後3時にいったん水位は下がりましたが、再び土砂降りとなったことから水位は320センチと急激に増水、六本杉付近の住民に対して避難命令が発令されました。

雨は激しいままで、夜間になっても降りやまず、午後4時20分に蔵田島付近の堤防が約100メートルにわたって決壊したのをはじめに、その後も各所で堤防が決壊、大量の泥水が村を襲いました。国道113号線は、各所で交通不能となり、米坂線も運行不能。村内では数多くの集落が孤立し、山腹に面した地域では土石流が発生、住宅・農地・公共施設などが甚大な被害を受けました。

出水は、通常考えられる雨量とは異なる、想像がつかないほどの雨量の影響であり、加えて荒川上流にある発電所ダムの洪水とともに鉄砲水となって流れたため、全村が激流と化し全く収集がつかない大洪水となってしまったのです。村内で犠牲になった人々は、あわせて34名。荒川本流沿いで19名と多く、大石川9名、沼川・幾地川・女川各1名でした。

人的被害	死者	34 人	住家被害	流失	144 棟
	行方不明	一人		全壊	227 棟
	負傷者	5 人		半壊	494 棟
				床上浸水	358 棟
				床下浸水	243 棟

参考・出典:関川村ホームページ、8.28水害の関川、関川村史 通史編

被害の様子



豪雨より一夜明けた下関の様子



押し寄せた流木の山を視察する第4代村長



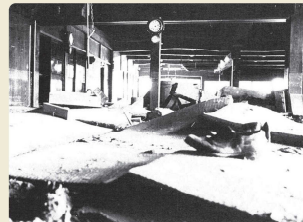
29日に空からみた高瀬付近



下関地区(上町)



土砂で埋もれた湯沢松岳寺



(重文)渡辺邸内

写真出典:上4枚関川村ホームページ下2枚写真で綴る40年の歩み

住民の避難状況



出典:写真で綴る40年の歩み

左の写真は救援物資配給の様子です。本流沿いで家を失った人々は、主として関谷中学校での生活が始まりました。朝日村(当時)からトラック4台に満載の野菜や、山北村(当時)からたくさんパンが届き、感激は一入。その後続々と日赤や全国から救援物資が届けられました。



橋脚に引っかかった流木



残された大量の土砂と流木



民家の基礎部分が根こそぎ流出